

シンポジウム

当事者視点で共同意思決定 (SDM) を考える

SDM: Shared Decision Making; SHARE : Support for Hope And REcovery

座長：伊藤順一郎（メンタルヘルス診療所しっぽふぁーれ）
佐藤由美子（国立精神・神経医療研究センター病院）
シンポジスト：中谷真樹、小川瑛子（住吉病院）
松本一生（松本診療所ものわすれクリニック）
山口創生、種田綾乃（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所）
松谷光太郎、ともちん（国立精神・神経医療研究センター病院）
指定討論：澤田優美子（日本社会事業大学大学院生）

「共同意思決定 (Shared Decision Making : SDM)」とは、利用者と医師（専門家）とが、治療のゴールや好み、治療の責任を話し合い、一緒に適切な治療を見つけ出していく、新しい治療決定のあり方です。

本シンポジウムでは、「共同意思決定」というテーマのもと、医療の中で、当事者の視点や主体性を大切にしながら治療決定を実現していくためにできることを考えました。

はじめに、座長の伊藤順一郎さんと佐藤由美子さんより、シンポジウムの目的と「リカバリー」「共同意思決定」についての説明があり、続いて、7名のシンポジストによる発表がありました。

住吉病院の中谷真樹さんと小川瑛子さんは、自分自身の治療を「自分で決める」という意味について、具体例を用いながら話されました。用意された選択肢から選ぶだけではなく、支援者と一緒に困ったことを分かち合い、具体的な方法を話し合っていくことが大切であること、具体的な決定は、そうした対話の中で生まれていくものであることを話されました。

松本診療所の松本一生さんは、認知症専門医として、またご家族への介護者としてのご経験をふまえて、認知症の方々の自己決定能力の判断の難しさについて話されました。そして、その中でも、共同意思決定の視点から、その人らしく生きることを支えていくことの大切さを伝えました。

さらに、国立精神・神経医療研究センターの山口創生研究員からは、実際に精神科診療場面での共同意思決定を行うためのシステム「SHARE (Support for Hope And REcovery)」を導入した調査研究についての報告がありました。このシステムでは、利用者が診察前の時間、ピアスタッフと共に自分の体調や診察で主治医と話したい内容等をパソコンに入力し、出力シートを主治医と共有しながら支援方針を決めていきます。このシステムを取り入れることによる半年間の変化として、利用者と主治医との信頼関係がより良好になっていることが確認されました。また、このシステムにおいて大切な役割を果たすのが「ピアスタッフ」の存在です。

国立精神・神経医療研究センター病院の松谷光太郎さんと、ともちんさん、精神保健研究所の種田綾乃からは、SHARE 利用者の声や、ピアスタッフとして SHARE システムに関わった実践を振り返りながら、利用者と医師とが共同意思決定を行うことを促すための、ピアスタッフとしての役割やあり方について発表しました。ピアス

タッフの役割として、利用者がなかなか言葉にできないことを主治医に届けていくためのサポートが大切な視点の一つであることが話されました。

指定討論では、日本社会事業大学の澤田優美子さんより、共同意思決定のキーワードとして「理念ではなく動詞（やるもの）」、「利用者の好みやリハビリゴールが大切であること」、「対話の大切さ」、「対等な関係性が重要であること」など、押さえておきたい視点が挙げられました。

会場からは様々な意見が挙がりました。

「“当事者視点” というテーマであるものの、支援者視点に偏っているのではないか」

「外来語が多くて受け取りづらい」といった大変重要なご指摘もあり、会場の皆さんの声によって、ようやく共同意思決定というテーマがより当事者に近い視点から議論されはじめた感がありました。

時間の制限もあり、会場の方のご意見や思いなども、その一部しかお聞きすることはできませんでしたが、本シンポジウムが今後、医療の中での治療決定や共同意思決定のあり方をより当事者の視点から考えるきっかけとなっていければと思います。

《種田綾乃（国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所）》